木曽三川分流への道を辿って

企画調査部　主事　小林　千夏
研究第一部　主事　長谷川美佳

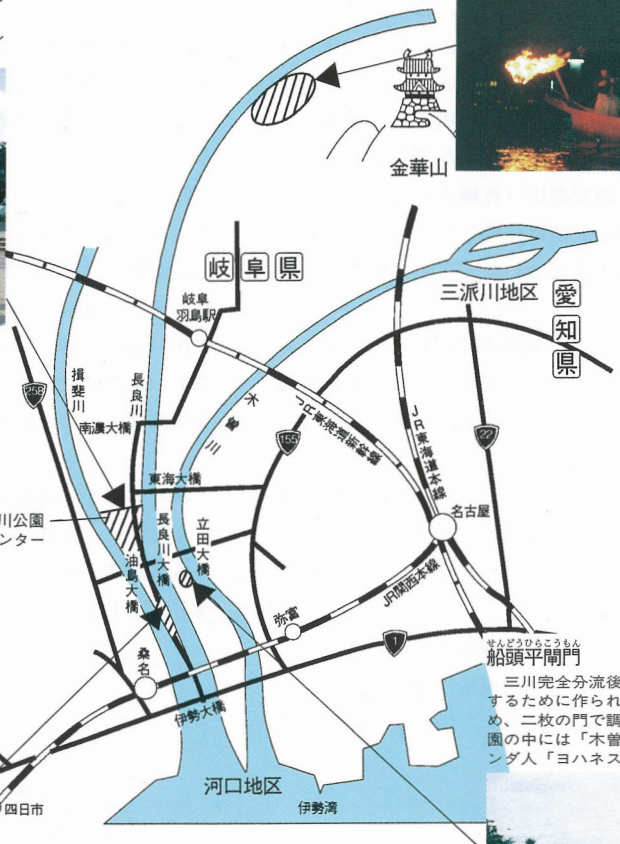
七月中旬、夏を間近に控えた岐阜県を訪ねた。滔々と流れる長良川、その左右に木曽川、揖斐川があり、完全な分流が成された今日でさえ、やはりこの川の持つエネルギーのすごさを感じた。その昔、幾度もの大洪水に見舞われた当時の人々の苦労がいかなるものだったのか、想像を絶するものがあった。だが、この流域は木曽三川の恩恵を多大に受けている地域でもある。舟運の発達によって盛んになった産業や文化が多いのが特徴の一つ。提灯、和傘、美濃和紙、桧工芸など、特に鵜飼は有名。長良川の沿岸にはその名も『材木町』という地名も残っている。『川と木と舟』の木曽三川、そのほんの一部をご紹介する。

夏の風物詩長良川の鵜飼

斎藤道三が構えた岐阜城を頂く金華山のふもとの河原には、夏ともなると古の情緒が醸し出され、毎夜観光客の歓声が沸き起こる。鵜匠は宮内庁に属するのだそう。篝火に映し出される様子はとても幻想的。クライマックスの「総がらみ」は六隻の鵜舟が並んで下ってきて迫力満点。

国営木曽三川公園

愛知・岐阜・三重３県の連携強化と発展、我が国最大のウォーターレリクエーションの一大拠点として整備中のこの公園は、現在においては中央水郷地区及び三派川地区がオープンしているが、全域完成すると国営公園としては日本最大となる。タワーからは三川とその周辺地域が一望でき圧巻。展示室ほか、野外には水屋などが復元されていて昔の生活を学べる。若いカップルから家族連れ、観光客など利用者層は幅広い。四季を通じて催し物も多くて楽しめそう。



船頭平閘門

三川完全分流後、木曽川と長良川を舟で行き来するために作られた。２つの河川の水位が違うため、二枚の門で調節しながら通過する。美しい園の中には「木曽川文庫」と分流に貢献したオランダ人「ヨハネス・デ・レーケ」の像がある。

千本松原・治水神社

江戸時代の宝暦治水の際、薩摩義士が堤防に植えた松原が美しい。この治水事業のために犠牲となった薩摩義士をまつるための神社が松原内にある。工事に携わった人々の忍耐と努力には頭が下がる思いがする。